



横井 英雄さん
(54歳・兵庫県三田市出身)

1956年11月24日、兵庫県西宮市で長男として生まれる。幼少を宍粟市で過ごし、名門龍野高校を卒業後、神戸大学工学部に進学。1979年に三徳㈱に入社し、レア・アース製品の開発・製造に携わる。1988年に三徳㈱の出資で創設した阿南化成㈱が外資系企業の傘下となり、2009年に阿南化成㈱に転籍。現在、同社の副社長を務める。

トマトジュースにケチャップを加えたスパゲッティ。これが結構いけますね。時折、柔らかな関西弁を交えながら料理の腕前を語る横井さんは、昨年10月に本社を神戸市から阿南市に移転した阿南化成㈱の副社長。レア・アース製品の製造・販売を中心に事業展開するグローバル企業の経営者の1人として活躍している。三田市にいる家族と離れ阿南に滞在する間は、身の回りのことはすべて自分でこなす。「こう見えても9割は自炊」というだけあって、料理には自信がありそう。お酒もいける。1年前に同僚が紹介してくれたという居酒屋には、今も欠かさず顔を出す。「阿南はつれないという感じがしないまち」と、地元の人も足しげに通うこの店で、働くおやじたちの会話を弾ませている。

― 駆け出しのころ ―

横井さんが初めて阿南を訪れたのは28年前。仕事の商談がきっかけだった。神戸大学工学部を卒業後、昭和54年4月に地元中堅企業の三徳㈱(本社・神戸市)に入社。当時はまだオイルショックの影響で社会に閉塞感がただよっていたが、古き良き時代にあつて仕事を学ぶ環境に恵まれた横井さんは、中堅企業でのやりがいを感じながら開発・製造、開発営業と責務を果たしていく。「苦労も多かったけれど楽しかった。とりわけ入社1年目が一番充実していたように思う。先輩から毎晩のように誘われた酒の席。このままでもいいのだから、よく夢を語り合ったものだ。」と駆け出しのころを振り返った。横井さんは、「働く」ということをこう考えている。「何か役に立ちたい

と考える人間が持つ本質。そして、自分が何かに役に立っているというアイデンティティーが、また働く意欲をかき立ててくれる」。常に目標を持ち志は高く、そして海外赴任や会社設立など豊富な経験を積んできた横井さんの言葉には、何事にも前向きで自己実現に努力を惜しまない人柄がにじみ出ている。

― 仕事と家庭 ―

横井さんには3人のお子さんがいる。ある日、物心ついた息子がこう言った。「父さん、次はいつ来るの」。横井家の父は、いつしか「帰ってくる人」ではなく「訪れる人」になっていった。会社とは対照的な評価に苦笑する。そんな息子の無邪気な言葉に、ふと自分の幼いころを思い出す。横井さんは、中学時代に父と祖母を亡くしている。父の背中を追い掛けた記憶がそれから止まっている。「私には、父親としての接し方一つ一つが勉強だったのかもしれない。正直、妻には苦労させていると思う」。仕事と家庭の両輪を回していたつもりでも仕事に偏りがちな生活が続いた。希薄になりがちな家族との絆の修復に、少しでも始めた「ありがとう」の心のキャッチボール。今では会社でも日常的となり、社員との心の潤滑油になっているという。

― 社会人として ―

2人の話題が「大切にしている言葉」になったとき、横井さんはジャケットの内ポケットから3枚の紙を差し出し、私に見せてくれた。その紙には、40代から

書き留めているという「心に響いた言葉」が記されていた。「(前略) 眠狎が深まると、互いの言葉が軽くなる。たがいに尊敬するとは、ほどよい距離感をとりあうことである。(宮城谷昌光・楽毅^{がき}より)」は、50代半ばの今、もつとも共感できる言葉だという。意欲旺盛だった40代では、冷静に物事を見つめようと自分を戒める言葉が、50代では、心構えや人間関係を悟った言葉が並ぶ。高校時代に歴史に興味を持ち、西洋、中近東、中国、そして日本史と愛読する書は多い。歴史上の人物の生きざまや名言を人生のモチーフにして、自分を磨き上げていく。そんな横井さんには「賢者は歴史に学ぶ」という言葉がお似合いだ。

最後に、横井さんのこんな例え話を紹介したい。「竹は節目があるからまっすぐ伸びていくが、節目がなければ倒れてしまう。社会人になるまでは小・中・高・大学という社会的・制度的節目がつくられているが、社会人にはそれがない。自分でつくっていくかなければならない。そして最も大切なのが信頼だ。信じること、信じられることで社会は成り立っている。そう願いたい。なぜなら、「信」じられる「者」は「儲ける」と書くからね」。

副社長にして決して高ぶらない普段着な人柄に、どこか心地よささえ感じられる、私の前にはそんな空間が広がっていた。